明倫紀要 16 (1)　10-17　(2013)

総　説

古代エジプトの「お守り」

内　田　杉　彦
明倫短期大学　歯科衛生士学科

Amulets in Ancient Egypt

Sugihiko Uchida
Department of Dental Hygiene and Welfare
Meirin College

キーワード：古代エジプト，護符，宗教，民間信仰，呪術
Keywords : Ancient Egypt, Amulets, Religion, Popular Religion, Magic

1．はじめに

古代人にとって，「自然界」は，意志や感情を持った神秘な「力」が支配する領域だった．自然現象や動植物の背後にはこの「力」があるとされ，それとどう対峙するかは彼らにとって重大な問題だったと言える．「力」には人間に恵みをもたらすものもあれば，害を及ぼすものもあり，好意的な「力」からは助けを得られるように，悪意を持つ「力」からは守られるようにすることがぜひとも必要だったのである．「お守り」（護符）も，人間生活に影響を及ぼす目に見えない何かがこの世にあるという信仰の顕われに他ならず，それを生み出した人々の世界観がそこに反映されている．それは数多くの護符が遺物として残されている古代エジプトの場合にもあてはまると言える．

それでは古代エジプト人にとって，彼らの「世界」とはどのようなものだったのだろうか．彼らが暮らしていた大河ナイルの流域は，不毛の砂漠に囲まれながら水と緑にあふれ，さまざまな自然の恵みが得られるところだった．そのため，そこは一定の宇宙秩序によって守られた「世界」であるとされ，そこを支配するさまざまな「力」は，おおむね人間に対して好意的な「神」として崇められた．世界とそれを動かす秩序は創造神，とくに太陽神をはじめとする神々が作り上げたもので，太陽神の後継者である王によって受け継がれていると考えられたのである[1) 2)]．

表１　古代エジプト年表（内田杉彦『古代エジプト入門』岩波書店，2007の年表より）．

先王朝時代（紀元前5500～3000年）
王朝時代（紀元前3000～332年）
初期王朝時代（第１～２王朝：前3000～2682年）
古王国時代（第３～６王朝：前2682～2191年）
第一中間期（第７～11王朝：前2191～2025年）
中王国時代（第11～12王朝：前2025～1794年）
第二中間期（第13～17王朝：前1794～1550年）
新王国時代（第18～20王朝：前1550～1069年）
第三中間期（第21～25王朝：前1069～712年）
末期王朝時代（第25～31王朝：前712～332年）
ギリシア系王朝時代（前332～30年）
プトレマイオス朝時代（前304～30年）
ローマ支配時代（前30年～後395年）

この世界観にしたがえば，古代エジプト人の住む「世界」においては，完璧な秩序が保たれているは

原稿受付：2012年12月17日，受理　2012年12月20日
連絡先：〒950-2086　新潟市西区真砂3-16-10　明倫短期大学　内田杉彦　TEL.025-232-6351（内線166）

ずだが，これはむろん理想にすぎず，実際には「世界」と人間の生活を脅かすものが存在することは常に意識されていた．太陽神は「世界」を混沌の海ヌンから創造したとされたが，ヌンはその後も「世界」を取り巻いており，再び「世界」をのみこんで混沌に返そうとしていると考えられていた[1]．このヌンの脅威は，「世界」を囲む砂漠や，外敵である異民族などによって示される．また，「世界」の内部でも，さまざまな不幸や疫病のような災いが絶えることがない．これは災いのようなネガティヴなものも「世界」の一部とされ，それを支配する魔物や悪意を持つ神々（「力」）がいるためであると考えられた．

このような脅威のうち，「世界」全体を危うくするものに対しては，王が神殿を造営して神々をまつり，為政者として社会秩序を守り外敵を防ぐことで対処した．一方，人々の日常生活が，人力では対抗できない「力」に脅かされたとき，彼らは神に祈り，あるいは神から分け与えられた「呪力」（ヘカ）を用いる呪術に頼るほかなかった[2]．「呪力」を自在に操れる者は神官や呪術師だけだったが，一般人でもある程度の「呪力」を携帯できるようにしたものが「お守り」（護符）である．「護符」を意味する古代エジプト語（メケト，ネヘト，サァ，ウェジャウ）のうち，比較的早い時期に使われたはじめの３つは，いずれも「守る」という言葉に関連を持っており，当時の護符が本来は「護身用」だったことがうかがえる[2) 3) 4)]．古代エジプトの護符は，王から庶民まであらゆる階層の人々が生前に携帯し，所有者が死ぬと，来世で続けて用いるため墓におさめられた．また，もっぱら死後の再生や来世の生活に用いるための護符（葬祭護符）も数多く作られている[2) 3) 4)]．当時の人々が死後に再生することを願った来世にも，現世と同じような不安はつきまとっていたのだろう．

護符は，準宝石や貴金属などで作られた高価なもののほか，貝殻や象牙などの有機物を素材にしたもの，大量生産が可能で安価なファイアンスの護符などさまざまなものがあり，形状だけでなく，素材の色にも象徴的な意義があった[2) 3) 4)]．たとえば青あるいは緑のトルコ石や碧玉は，生命力に満ちた水や植物を象徴するものとしてしばしば用いられ，同じ色のファイアンスの護符も数多く作られている．

護符を携帯するには[2) 3) 4) 5)]，袋などに入れて持ち運ぶほか，護符に穴をあけるか環をつけて紐や針金を通し，首飾りや指輪として身につける方法が用いられた．葬祭護符はミイラの包帯に巻き込むのが一般的だったが，包帯などに縫いつけられるものもあり，そうした護符には糸を通す穴があけられている．

２.動物の護符

エジプト最古の護符は，ナイルの谷に人々が住み着いて間もない先王朝時代初期にさかのぼる．古代エジプトの神々はしばしば動物の姿で表されているが，エジプト最古の護符にも，動物をかたどったものが多い．野生動物は，自然界を支配する「力」の顕われとされていたと考えられる．動物の護符は，それぞれの動物のもつ強さや，素早さ，繁殖能力などを宿すとされ，それを携帯すれば，動物の神秘な能力のいくらかを手に入れることができると信じられていたのかもしれない[2) 3) 4)]．しかし動物の護符には，古王国時代後期に現れるサソリの護符のように，危害を及ぼす動物や，その背後の邪悪な「力」を防ぐ「魔除け」もあったとみられる[2) 3) 4)]．サソリの女神セルケトは治療の神，死者の守護神として崇拝されたが，その信仰の根底には，サソリとそれを動かす「力」に対する畏怖があり，それをなだめて無害にしようとする人々の意思があったとみることができる．

同じことは，ミイラ作りの神であるアヌビスについてもあてはまるだろう．この神は尖った耳と鼻面を持つイヌ科の動物，あるいはその頭部を持つ男性の姿で表されるが，この動物は砂漠に生息するジャッカルやオオカミ，キツネなどの特徴を合成したもので，アヌビスはそのような野獣に対する恐れに由来する神とみられる．砂漠の墓地に埋葬された遺体は，これらの動物に食いあらされる恐れがあり，それは遺体の保存を死後の復活・再生の必要条件とする古代エジプト人にとって重大な脅威だった．そこで彼らは，そのような動物たちの背後の「力」を崇めてなだめ，墓地と死者を守る神アヌビスとしたとみられるのである[3]．この神を示す動物をかたどった最も古い護符は，先王朝時代の墓から発見されており，おそらく遺体が食い荒らされるのを防ぐ魔除けだったとみられる[3]．

自然界に存在する水は，世界を取り巻くヌンに端を発しているとされていた．水は，人間や動植物の生命維持に欠くことのできないものだが，それは創世の源であるヌンが万物を生み出すエネルギーを保ち，それが生命力として水中に秘められているため

と考えられていた．しかしその一方でヌンは，秩序ある世界を飲み込もうとする恐ろしい混沌の領域でもあり，そのためヌンに端を発する川や沼などは危険な場所であった．古代エジプト人にとって水の広がりとは，正と負の性格を併せ持つ存在であり，そこに生息する生物やそれをかたどった護符には，ヌンや水が持つとされたそのような二律背反的な性格が反映されていると言える．

エジプトのナイル流域に生息していた水生生物のうち最も恐れられていたのはおそらくワニ（ナイルワニ）であろう．ワニの餌食にされた犠牲者の遺体は食いつくされて埋葬することができず，来世に復活する望みも絶たれてしまうのである．ワニをかたどった護符は，統一王朝成立以前からおそらくワニ除けのお守りとして作られており，この動物に対する畏怖の念が根深いものだったことをうかがわせる[3) 4)]．しかしワニは，単に恐ろしい猛獣だっただけではなく，ヌンのエネルギーを秘めた存在でもあった．ワニの姿あるいはワニの頭部を持つ男性の姿で表された神ソベクは，ワニに対する恐れから生み出された神ではあったが，生命と再生を象徴する神でもあったと思われる．古代エジプト人は世界を作り出した太陽神も本来はヌンから生まれたと信じており，天地創造ののちも，夜明けにヌンの水中を通り抜けてエネルギーを補給し，天空に上っていくと信じていたが，水中から浮上するワニも同じような再生の力を持つとみていた[3)]．ソベクは太陽神ラーと結びついてソベク・ラー神となり，日輪を頭上にいただくワニの姿の護符とされたが，その背景には，ワニに対するこうした見方があったと言えるだろう[3)]．

ワニと同じく水中に生息するカバは，農作物を食い荒らし，人を襲うこともある猛獣として恐れられており，とくに雄のカバは邪悪な力の象徴とされ，災いの神であるセトの化身とされていた[3) 4)]．先王朝時代に作られたカバの護符は脚を縛られたカバを表し，脚の部分の穴に糸を通してビーズと数珠つなぎにされ，身につけると逆さ吊りになるように工夫されている[3)]．これは邪悪な「力」の顕われであるカバの害を防ぐ「魔除け」だったとみられる．しかしカバの護符には，水辺や水中を静かに歩く姿を表したものもあり，同じような姿のカバの像が副葬品とされることもあった[3)]．おそらくカバは単に恐れられただけでなく，ワニと同じように，水に秘められた生命力と再生の象徴とも考えられていたのであろう．

古代エジプト人は，カバの雌については好意的な見方をしていた．これは妊産婦と新生児を守るとされた女神タウェレト（トエリス）が，雌のカバの頭部を持つ姿であることからうかがえる．古王国時代の墓浮彫には，カバの子を狙うワニと，逆にワニを餌食とするカバの姿がみられる[6)]．おそらくこうしたカバの習性が強い母性の象徴とされ，母子を守る守護神にふさわしいとされたのだろう．雌カバの頭部に妊産婦の胴体，ライオンの足，ワニの背中が合体した姿のタウェレトの護符は，古王国時代後期からその後の王朝時代を通じて数多く作られており，妊産婦や妊娠を望む女性に人気があったと思われる[2) 3) 4)]．

水の生命力の顕われとされていたのはワニやカバのような大きな動物だけでなく，もっと小さな水生生物も例外ではなかった．たとえば中部エジプトのヘルモポリスの創世説話では，世界を作り出す原動力となったのはヌンの水中にあった八柱神とされ，そのうち男の神々がカエルの姿で表されている[2)]．これはおそらくカエルが，水中や泥の中から大量に自然発生するかのように見えるために，生命と再生の象徴とされたのだろう．カエルはまた，出産の女神ヘケトの姿でもあり，おそらくこのために安産や多産のお守りとして，カエルの護符が古くから作られていた[2) 3) 4)]．

古代エジプト人の「世界」のなかで，水と並んで生命の誕生や再生と結びつけられていたのが太陽である．太陽神は創世ののち，太陽となって昼間は天空，夜は死者の住む冥界を旅するとされ，夕方に死に，朝に生まれる「死」と「誕生」（再生）のサイクルを繰り返すとされたのである[1)]．古王国時代に

図1．タマオシコガネ（スカラベ）（アコリス調査隊提供）

は，この太陽神の信仰は王権と結びつき，その象徴としてピラミッドのような巨大建造物が造営される．この古王国の末に出現し，太陽の運行と再生に結びつけられた護符が，甲虫の一種であるタマオシコガネ（スカラベ）をかたどったスカラベ護符[3) 4)]である．餌となる獣糞を丸い球にして巣穴まで転がしていくこの甲虫の姿は，太陽の動き，とりわけ日の出を連想させ，太陽神は夜明けに，太陽を押し上げる巨大な甲虫の神，ケプリとなると信じられたのである[1)]．タマオシコガネは羊の糞を洋梨型にまとめて卵を産みつけ，かえった幼虫がその糞を餌にして成長し，地上に出るが，エジプト人はこれを，タマオシコガネが転がす丸い玉から幼虫が自然発生するものと考えた[3)]．そのためこの甲虫は，無から生じる生命，太陽のように繰り返される再生・復活の象徴となり，それをかたどった護符が作られるようになったと考えられる．

古王国末に初めて作られたスカラベ護符は甲虫の形を素朴に表現したものだったが，第一中間期の中頃には，護符の下面を平らにして文様や図像を刻んだものが作られるようになり，中王国時代には所有者の名前や称号が刻まれて印章としても利用されるようになった[3)]．スカラベ護符はペンダントとして首にかけられただけでなく，それをとりつけた指輪も作られ，指輪をはめたままでスカラベ護符だけを回転させ捺印できる仕組みになっていた[3) 4)]．底面の装飾には，渦巻き文様や植物文様のほか，生命や富を意味する文字，神々の姿などもみられるようになる[3)]．スカラベ護符は古代エジプトの護符のなかで最も数多く作られたもののひとつとなった．これはこの護符が印章としても使われたことと，縁起の良い装飾が加わることで「ご利益」が増すとされたためだろう．

新王国時代になると，スカラベ護符の印章に代わってスタンプ印章が盛んに用いられるようになり，大部分のスカラベは純然たる護符となった[3)]．この頃のスカラベ護符の底面には神々の姿や，神に対する祈願文，神の加護が確かに得られることを保証した言葉，そして王の姿や王名が刻まれた．王は神々に供物を捧げ，あるいは外敵と戦うなど世界の秩序を守る姿で表現されており，そのような図像が，護符の所有者をも災いから守ると考えられていたのだろう．王名もまた同じ力を持つと信じられており，在世中の王だけでなく，過去の有力な王も，その名を刻まれる場合があった．新王国時代にはさらにスカラベ護符の変形として，上部がワニや魚，ライオンなど様々な動物の彫刻になった護符（スカラボイド）も作られた[3) 4)]．この護符はスカラベと同じく楕円形の底面に装飾が刻まれており，スカラベそのものの呪力に，それ以外の動物の護符などの効能を組み合せたものだったのだろう．

3．オシリス神話と護符

古代エジプトの護符には，生物以外の象徴をかたどったものも数多くあり，なかでも特に一般的ないくつかの護符は，再生・復活の神であるオシリスの神話に関わりを持っている．まず「永続」や「安定」を意味する文字，ジェド[2) 3) 4)]は，おそらく枝を切り払われた樹木の幹か，穀物の束を巻き付けた柱を表しており，古王国時代までにはそれをかたどった護符が現れる．このジェドは本来，メンフィスの神プタハの象徴とされていたが，古王国の末までにはオシリスの象徴のひとつとなった．神話によれば，王としてエジプトを治めていたオシリスは弟のセト

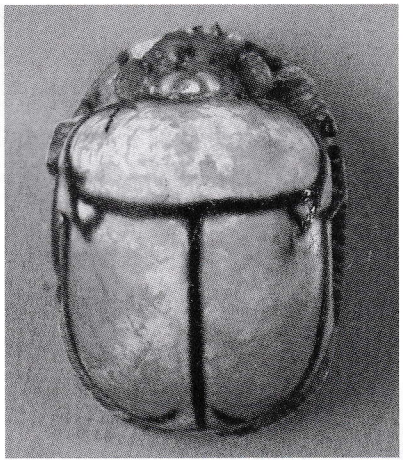

図２　スカラベ護符（上面）（アコリス調査隊提供）

図３　スカラベ護符（下面：王の名と称号などが刻まれている）（アコリス調査隊提供）

に殺害され，身体をバラバラにされたが，妹であり妻であるイシスがそれをつなぎ合わせたことで来世に復活し，永遠の生命を得た．ジェドはこのときのオシリスの背骨とされるようになり，ジェドの護符は，死者がオシリスと同じように復活を遂げるため欠かせない葬祭護符のひとつとなった．新王国時代の葬祭文書「死者の書」に含まれる「黄金のジェド護符」のための呪文（第155章）には，ジェド護符を遺体の喉元に置いてこの呪文を唱えれば，死者は霊魂となって来世に住み，オシリスの祭壇から供物を受け取ることができると記されている[2) 7)]．

ジェドがオシリスと直接の関わりを持つ護符だったのに対して，イシスと結びつけられたのがティト[2) 3) 4)]の護符である．ティトは布で作った結び目を表しており，一つの輪が上に向き，下には二つの輪とそれに挟まれた帯が垂れている．これが本来，何を意味していたのかはわかっていないが，新王国時代にはイシスの結び目あるいはイシスの帯とされ，同じ頃に作られたティトの護符は，おそらく血の色を表す紅玉髄などの赤い素材や，生命の色である緑のファイアンスを素材にすることが多かった[2) 3) 4)]．この護符やその赤い色は女性の生理と関連があったとされているが[3) 4)]，そうだとすればティトは，母となる女性の身体を守るという意味を持っていたのかもしれない．また，「生命」を意味する文字，アンクが本来はティトの垂れ下がった２つの輪を水平にしたものだったとみられること[8)]を考え合わせると，ティトは生命の誕生，出産に関わりがあったとも考えられる．

イシスは，復活したオシリスとの間に息子ホルスをもうけて守り育てたとされる．ティトの護符には，夫を助け，我が子を守った女神の力が宿ると信じられていたのだろう．「死者の書」第156章には，この護符が死者の埋葬のとき，遺体の首回りに置かれるなら，イシスの力が死者の身体を守ると記されている[3) 7)]．

イシスのもとで成長したホルスは，父の仇であるセトを倒して父の王権を引き継ぐ．このホルスは本来，ハヤブサの姿をした天空の神で，国土統一をなしとげた王家の守護神となった[1)]．王が統一前後の時期から用いた王名「ホルス名」にはこの神がハヤブサの姿で表され[9)]，ホルスと思われるハヤブサの姿も，浮彫や彫像などに古くから見られる．

しかしホルス神をそうした姿で表現した護符が現れるのは新王国時代になってからであり，ホルスの

図４　ウェジャト護符（アコリス調査隊提供）

護符として古王国時代から広く用いられ，様々な形のものが大量に作られたのは，「ホルスの眼」であるウェジャト[2) 3) 4)]だった．ウェジャトはスカラベとともに古代エジプトの代表的な護符であり，来世のお守りとして不可欠の副葬品だったばかりでなく，所有者の生前にも強力な「魔除け」として携帯されたとみられる．ウェジャトの形は眉を伴った人間の目に似ているが，ハヤブサ（ランナーハヤブサ）の眼下の斑紋を様式化した突起が下についており，ハヤブサの神ホルスの眼であることが示されている[3) 4)]．

神話によればホルスは，セトとの戦いで左目を傷つけられたが，知恵の神トトがそれを治したとされ，この回復された左目がウェジャト（「健全なもの」）とよばれるようになった．天空の神ホルスの右目は太陽，左目は月であり，この左目のエピソードは月の満ち欠けを説明したものと考えられるが，それは同時に，悪神セトに対するホルスの勝利，世界を脅かす邪悪な「力」に対する勝利を示すものでもあった[2) 3) 4)]．そのためウェジャトは，治癒や健康を保証し，邪悪を退ける強い呪力を持つとされるようになったのである．やがてホルスの（傷つけられなかった）右目もウェジャトと呼ばれるようになり，左目だけでなく右目を示すウェジャト護符も数多く作られた．

ホルスはこのウェジャトを，亡き父オシリスへの捧げものとし，それによってオシリスの復活が助けられたとされる．このためウェジャトの護符は，ジェドやティトなどとともに死者の再生を助ける葬祭護符としても広く使われ，ミイラを巻く包帯には必ず入れられた[3) 4)]．また，遺体をミイラとする際に内臓を取り出すため脇腹に入れられた切り口は，縫い

合わされたあと，ウェジャトを描いた板で覆われたが，これは切り口を呪力で癒すとともに，有害なものが体内に入らないよう防ぐためだったのだろう[3]．

ウェジャトの護符は，アウトラインだけの簡単なものから細かな透かし細工を施したものまで，多種多様な作品が残されており，そのなかにはハヤブサの翼や脚をウェジャトにつけたもの，おそらく護符の効能を増幅させるため４つのウェジャトを組み合わせたものなどがみられる[3]．

４．葬祭護符の発展

ミイラとともに埋葬される葬祭護符は，最初の統一王国である古王国が衰えて第一中間期になると，種類・量ともに増加する[3) 4)]．これは世界秩序を維持していたはずの王がいったん無力となったため，人々の生活のなかで大きな位置を占めていた来世信仰も混乱をまぬがれず，来世への新たな道が求められた結果であろう．たとえば，手足や腕，顔など人体各部を表現した護符は第一中間期特有の葬祭護符であり，遺体が損傷した場合に，来世で代わりとなるものだったとみられる[2) 3) 4)]．これはミイラ作りや墓地の管理が難しくなった当時の世相を反映したものかもしれない．この頃にはまた，王冠や，王冠につけられるコブラの印（ウラエウス）など王権の象徴をかたどった護符が，王族ではない人々のために初めて作られる[3) 4)]．第一中間期には，かつて王のために用いられていた死後の再生・復活の呪文が，王族以外の人々にも開放される「葬祭の民主化」という状況が生じるが[10]，これら王権にまつわる護符の出現もその一環と言えるだろう．

この時期にはさらに，死者は生前の行為について裁きを受け，正しく生きたと認められた者だけが再生を許されるという「死者の審判」[10]の思想が生まれ，これが以後の古代エジプトの来世思想を代表するものとなる．この審判の中心をなすのが，死者の理性と感情，記憶のよりどころとされた心臓と，秩序や規範を象徴するマアトの羽根が秤にかけられる「心臓の計量」[10]であった．心臓は現世と来世の生活だけでなくこの「計量」にも必要であり，遺体がミイラにされるときにほとんどの内臓が取り出されたあとも，心臓は体内に残されるのが普通だった．しかしこうして残された心臓も何らかの事情で失われるかもしれない．これは当時の人々が最も恐れたことであり，「死者の書」には心臓が死後に奪われるのを防ぐ呪文（第27～29章A）がみられるほか[3) 4) 7)]，万一の場合に心臓の代わりとなる護符が作られた[3) 4)]．この護符は，人間ではなく羊の心臓をかたどったものだったが，おそらく理性や感情など人格を構成する要素が宿ることを示すため，人間の頭部がついた例もみられる．

心臓に人格や記憶が宿るとする見方からは，新たな懸念が生じる．「死者の審判」で計量される心臓が，死者にとって不利になることをもらすのではないかという不安である．そこで，心臓が都合の悪い証言をするのを防ぐ呪文（「死者の書」第30章B）[7]を刻んだスカラベ護符（「心臓スカラベ」）[2) 3) 4)]が新王国時代初期までに出現した．この心臓スカラベは，葬祭護符としてミイラの包帯に巻き込まれるか，胸飾りにはめ込まれてミイラの首にかけられた．スカラベ本体は，心臓の護符と合体した形のものや，頭部が人間の顔になったもの，復活・再生に関わる太陽神とオシリス神が胴体に描かれたものなどがあり，心臓が人格を持ち，来世に復活するための鍵とされたことをうかがわせる．

この心臓スカラベのほか，新王国時代までに出現した特徴的な葬祭護符としては，蛇の頭をかたどった護符[2) 3) 4)]があげられる．紅玉髄などの赤い素材か黄金で作られたこの護符は，死者が墓地で蛇に噛まれるのを防ぐ呪文（「死者の書」第34章）[7]が刻まれることから蛇除けのお守りだったとみられる．墓地のある砂漠はコブラなど毒蛇のすみかでもあったから，人々の蛇に対する恐れは死後にまで及ぶものだったのだろう．

不毛の砂漠とは対照的な，ナイル流域の植物の生命力を象徴する護符がウァジ[2) 3) 4)]である．これはエジプトを代表する植物のひとつであるパピルス草の護符で，植物の色を示す緑の素材で作られることが多かった．中王国時代の葬祭文書「コフィン・テキスト」（第106呪文）によると，この護符はミイラの喉元に置かれることになっており，死者が来世で呼吸をするのを助けるとされていた[3) 11)]．新王国時代の「死者の書」（第160章）では，この護符が無事に保たれるなら死者は健康で無傷であり，死者の手足が「干涸びる」ことがないとされている[3) 12)]．ウァジの護符には，水のない砂漠の墓地に埋葬されたら砂埃に埋もれて窒息するのではないかという恐れ，ナイルの谷の水と緑から切り離されたくないという願いを感じとることができる．しかしウァジはパピルス草そのものではなく，それを模倣した柱（パピ

ルス柱）や笏（パピルス笏）を表している．パピルス柱は神殿建築に用いられた柱であり，パピルス笏は女神の持物だったから，この護符は植物の生命力だけでなく，神々の加護も授けるものとされていたのだろう[3]．

新王国後期から第三中間期にいたる時期には，新たな護符が数多く作られた[2) 3) 4)]．たとえば神の頭部と半円形の襟飾りを合体させた形の護符（アイギス）は，祭礼の折りに神像を運ぶ舟型の神輿（聖舟）の舳先と船尾の飾りをかたどったもので，太陽神の再生と守護の力に関連があるとされる[2) 3) 4)]．細長い平衡錘がついたメニト首飾りは，太陽神の娘であるハトホル女神の象徴のひとつとされるが，この錘をかたどった護符もこの時期に出現し，女神の頭部やアイギスと組み合わせた形のものが作られるようになる[2) 3)]．メニトの錘は首飾りをつける人間の背中に位置するから，この護符には盲点である背後を守るという意味があったのだろう[3]．同じ盲点を守るという意味を持ったものに，古代エジプト人が就寝時に用いたヘッドレスト[3) 13)]がある．このヘッドレストは死後にも必要とされ，所有者が死ぬとミイラとともに棺に入れられた．「死者の書」(第166章)[3) 7)]によれば，これには死者が来世で目覚めるようにし，死者の頭が切り落とされないように守るという意味があり，おそらくこのために新王国時代には，ヘッドレストの形の葬祭護符（ウェレス護符）[3) 4)]が作られている．

末期王朝時代には葬祭護符の種類はさらに増え，ミイラを覆う包帯のなかにはジェドやティト，ウェジャトのような古くからの護符にくわえ，定規や大工道具をかたどった護符や，おそらく呪文を操る能力に関係するとみられる書字板の護符など新たな形式の護符が数多く見られるようになる[2) 3) 4)]．たとえばスカラベ護符にハヤブサの翼を組み合わせた有翼スカラベ護符[2) 3) 4)]がミイラの包帯の胸の位置に固定されるようになるが，これは実際に羽根を持つこの甲虫の姿と，太陽を押し上げて空に上る太陽神のイメージを重ねたものだろう．二本の指，おそらく人差し指と中指を表わす護符[3) 4)]は，ミイラの内臓を取り出した切り口のそばに置かれており，ミイラ職人の指を表わすとみられる．おそらくこれはミイラ作りのプロセスが完了したことを保証し，切り口を保護するものだったのだろう．

図５　女神の頭部がついたアイギス護符断片
（アコリス調査隊提供）

５．神々の護符

古代エジプト人は古くから数多くの神々を信仰しており，各地に建設された神殿では，地方神や全土で崇拝された国家神などの彫像が「本尊」としてまつられていた．神はそのような神像に宿ることで礼拝と供物を受け，祈りにこたえるとされていたのである．神像は神が宿る「容器」であり，人間と神々の間をつなぐ「電話回線」だったとも言えるだろう．

神々の加護を得たいという願い，神々にあやかろうとする心情は護符にも表されている．しかし新王国時代以前には，神殿にまつられる神々の姿の護符が作られることは稀であった[2) 3) 4)]．これは古代エジプト社会においてそうした神々に本来，期待されていた役割が，なによりも宇宙秩序や社会秩序の維持にあったためであろう．神の姿を形作れば，それがたとえ小さな護符であっても，神が宿るよりどころになりうる．人々の個人的な願いを託す護符に，社会や宇宙を守る神の姿をじかに表現するのは憚りがあったのだろう．

ただし神々のなかでも，神殿にまつられることなくもっぱら個人の生活に関わるとされた神々は，早くから護符に表されていた．前述のタウェレト女神はその一例であり，この女神とともに出産時の母子や家族の生活を守るとされたベス神もそうした神々に数えられる．羽飾りをかぶり，ライオンのような顔とたてがみをもつ小人の姿のこの神は，中王国時代の安産の護符に様々な精霊や守護神とともに描かれ，新王国時代以後は，この神をかたどった護符が数多く作られた[2) 3) 4)]．

新王国後期から第三中間期にはいると，神殿にまつられる神々の護符が徐々に作られるようになり，末期王朝時代以降にはその種類と数はきわめて多くなる[2) 3) 4)]．これは新王国時代以降，神殿が，公的な祭祀だけでなく民間信仰の場としても大きな位置

を占めるようになり，民衆のための礼拝所も併設されるようになることや[1]，エジプト国内で異民族の影響力が高まるなかで伝統宗教が重視されるようになったことと連動していると思われる．護符となった神々には，国家神アムン・ラーのような万能の神や，太陽神などの創造神のように宇宙の秩序や再生に関わる神々，各地で信仰された地方神などが含まれるが，より身近で具体的な加護が期待された神としては，イシスとホルスがあげられる．幼子のホルスを膝に乗せて腰掛け，授乳する姿でしばしば表されるイシスは，子を守り育てる母性の象徴だっただけでなく強い呪力を持つ女神でもあり，それを用いてホルスを害虫や危険な動物から守ったとされていた[2]．そのため，この女神の姿を表した護符には，子供たちを同じように守る力があると信じられていたであろう[2) 3) 4)]．また新王国後期の呪術文書によれば，イシスの像は病人から病気を吸い取るとされており，この女神の護符にも同じ効果があるとされていたのかもしれない[2) 14)]．子供のホルスがサソリと蛇をつかみ，ワニを踏みしめて立つ姿を表す石碑（キップス）も，有害な生物を防ぎ，病気を治す効果があるとされており，神殿や個人の住居にまつられたほか，それをかたどった護符も作られていた[3]．

6．おわりに

今日，我々現代人は科学とテクノロジーの時代に生きている．古代人にとって神秘な「力」に満ちていた自然界も，いまや法則と因果関係によって説明されるようになり，日々の暮らしも，古代の人々のそれに比べ遥かに快適で安全になっている．

しかしそれでもなお，我々は，人間の力ではどうにもできないものがこの世にあることを意識しており，人智を超えた何ものかを信じ，頼る心を持っている．現在のエジプトでは，自動車の運転席に，手や青い眼をかたどったお守りが下がっているのを見かけるし，我が国では神社の交通安全のお守りが同じ位置にある．最新の医療を受けられる病院でも，ベッドの枕元には千羽鶴や病気平癒のお守りが置かれている．「お守り」に込められた人々の願いは，古代も現代も基本的には変わることはないし，今後も絶えることはないだろう．

＊本稿は，2012年度明倫短期大学公開講座（第２回，2012年12月１日）の講演内容に，加筆・修正を施したものである．

文　献

1）内田杉彦：古代エジプト人と神々．明倫歯誌，7（1）：39-44,2004

2）Germond, P. : The Symbolic World of Egyptian Amulets. 5 Continents, Milan, 2005

3）Andrews, C. : Amulets of Ancient Egypt. British Museum Publications, London, 1994

4）Andrews, C. : Amulets. Redford, D.B. (ed.) : The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt, Vol.1. 75-82, Oxford University Press, New York, 2001

5）Falkovitch, J. : L'usage des amulettes Égyptiennes. Bulletin de la Société d'Égyptologie, 16 : 19-26, 1992

6）Kanawati, N. et al. : Mereruka and His Family, Part III : 1, pls. 16, 69-70, Aris and Phillips, Oxford, 2010

7）Allen, T.G. : The Book of the Dead or Going Forth By Day. 38-40,44,154-155,162, The University of Chicago Press, 1974

8）Fischer, H.G. : Some Emblematic Uses of Hieroglyphs with Particular Reference to an Archaic Ritual Vessel : 1. A Hieroglyphic Dish. Metropolitan Museum Journal 5 : 5-15, 1972

9）内田杉彦：ピラミッドと王権．明倫歯誌，6(1)：55-61,2003

10）内田杉彦：古代エジプトの「死後の世界」．明倫歯誌，5（1）：58-63,2002

11）Barguet, P. : Textes des Sarcophages Egyptiens du Moyen Empire. 143-144, Les Éditions du Cerf, Paris, 1986

12）Barguet, P. : Le Livre des Morts des Anciens Egyptiens. 227, Les Éditions du Cerf, Paris, 1967

13）Wilkinson, R.H. : Reading Egyptian Art. 158-159, Thames and Hudson, London, 1992

14）Borghouts, J.F. : Ancient Egyptian Magical Texts. 32(No.48)，E.J.Brill, Leiden, 1978